って」

Kちゃんはひとりっ子でおおぜいのおとなに大切にされ豊かに思うままに育ちました。おとなばかりの環境なので日常の言語もおとなのようで級の中に「テレル」とか「やじ馬」などということばを流行させました。

そのRちゃんの創作です。「おーちゃんはいつも喧嘩ばかりしていたの。とっくみあいしてこうやって（と、隣りの子の首を持ってねじ倒そうとすると『プロレスじゃあないぞ』とやじられました。）首なげをしました。幼稚園で遊んでいて、帰る時なかなか帰らなくてお母さんが迎えにきてひっぱって帰らせて、家に帰って『昼寝をしなさい』って言われてもねなくて、木に棒をぶら下げて剣道でポカンポカンやっていたんでお母さんが連れて来てとうとう昼寝させられたんだって。あの日、『悪いことをしたなあ』と思って『もうしません』と悪いことをしなくなりました。」

以上の三つの創作の話を考えますと、文章の構造では、自分の生活経験の発表でみられた情緒、思考の表現力が筋を作ることにとられて少し崩れていますが、ことばのおもしろさが現れてきています。この創作ももちろん、生活経験や環境と全く別個なものでなく、おーちゃんやねずみや象に託した自分の種々の経験—自分の実際にやったこと、やってみたいこと、友だちのやっていたこと、聞いたことなど—をおり混ぜてまとめられたものです。

幼児の生活経験が、そのまま経験で終ってしまうのではなくて、それが幼児期における人間形成の基礎を作る上に大きな位置を占めている言語という一つの表現活動に生かす為に、その良き場を与えることによって、幼児の思考も、情緒も、社会性も、自分のことばで表現し、自分なりの一つのまとまりをつけていく間に経験が自分のものとなり活用され発展していきます。

（東京・芝幼稚園）

日頃感じたまま

吉江紀子

卒業してもう三年、今年三月、私にとってははじめての卒業生を送り出して、現在は、二年保育の級で、毎日を夢中で過ごしております。改めて考えてみますと、この小さな人たちとのつながりの中で、どんなに多くのことを教えられているか、ふだん

見過ごしている場面にも、考えなければならない問題が含まれていることに、今更のように気がつきました。

二学期もなかば、遠足、運動会と、行事も多く、子どもたちの生活は、一段と活発になってきました。話し合いの機会も多く、いつも、ハイ、ハイ、と勢よく手が挙がります。級は三才組からの人が、半数以上ですが、新学期当時から、二、三人のほかは、皆の前で喜んで話せました。二十二号台風の翌々日でした。「皆さん元気で来られてよかったわね。でも、お水がたくさん出て、心配したお友だちの家もあったのよ」と、話し出しますと、「先生、先生、私の家の中まで、お水が入って来ちゃったの」と、話し出したのは、これまで、自分から大きな声を出したことの無いN子ちゃんでした。皆も一せいに注意を向けます。「どんなにたくさんでした？」と、真剣になりますと、少しはにかみながらも、「ここらへんまで。それでお母様、たたみを干しているの」と熱心に話し続けました。大きな出来事に出会って、強い印象を受けたことが、N子ちゃんの口を自然に開かせたのだと思います。これがきっかけになって、その後も、らくな気持で、皆の前で、話すようになりました。子どもたち自身の新鮮な驚きや、感動に、心から共感して、それをひきだす機会をとらえることが大切だと思いました。一対一ではよく話せるのに、やはり、話し合いの時となるとしりごみしてしまうSちゃんにも、らくな気持で、話せるようにしてあげたいと思い、ふだん、たのしそうに話してくれる家族のことから、きっかけをみつけるように心掛けています。

幼稚園の庭の柿の実が色づいてきたことから、実りの秋の訪れを話し合い、実際にも見られるように、いろいろな果物を、部屋に置いておきました。枝のまま花瓶にさしておいたざくろが、珍しいらしく、早速、そのまわりに集って、「おいしそうね。これ本当にたべられるわよ」「ちょっとたべてみようか」と、今にも口に入れそうでした。そこで相談して、食後に、皆でいただくことにしました。「先生のお庭になっていたざくろよ。どんな味がするかしら」皆まじめな様子で、そろそろと噛んでみて、「すっぱいわ」「少しにがい」「甘いよ」など、終には、「ああおいしかった。もっと欲しくなっちゃった」と言いながら、いとも満足そうな顔つきでした。観察といっても、見たり、味わったりする知識的な面ばかりでなく、みんなで話し合いながら、楽しく過ごす雰囲気も、忘れないようにしたいと思いました。

先学期から飼っているかめも、興味の的になっています。そろそろ冬仕度で、砂の中にもぐりこみ始めたので、冬眠のことを話しますと、「その間、何もたべないの？」「かわいそうに」などと言っていました。ある日、ひょっこりと、また砂の上に出て来たのをKちゃんがみつけて、大騒ぎです。早速そばに行ってみます。「先生、

私のお弁当の玉子、あげようかしら」「目をつぶっているわ。やっぱりねむいのよ」などと話し合っていますと、次々と、皆も寄って来て、長い間、のぞいていました。お昼には、我も我もと、餌をあげようとしました。このように、誰かが、関心を示した時、ちょっとの心遣いで、全体の興味をひくように仕向けることが出来るのを、実際に知りました。皆で、無事に冬越しさせようと、はりきっています。

良い生活習慣を身につけるには、毎日の心掛が大切です。お弁当の仕度も、なるべく早くきちんと出来るように、一番始めに、用意の手順を、はっきりのみこめるように、よく説明します。それこそ、バスケットの出し入れから、お弁当とお箸を並べて、袋や紙をしまうことまで、一人ひとりみて歩きました。数日間は、ゆっくり時間をかけて、全部が出来るのを待ちました。するとそのあとは、スムースに運べたようです。けれども、こちらが気がせいていたり、二、三人でも、うまく出来ないままにしておくことが続くと、その周囲の人たちまで、くずれてきてしまいます。用意の遅くなりがちな人には、目立たないように声をかけたり、「皆さんが待っていますよ」と、周囲の中の自分の状態に目を向けるようにしてみました。すると、ゆっくりではありますけれど、自分で気付いて、しようとする気持がみえてきました。こういうことは、はじめが大切なこと、根気強い態度が大切なことを知り、先を急いで、つい叱言がましい口調になってしまうのを反省しています。

食前食後の口をゆすぐことにしても、はじめは、皆が一しょに並んでいって、うがいをし、定められた所にコップをしまうことを、毎日くりかえしました。そのうちに、何の負担もなく身についていきました。もうすっかり習慣になっていて、時々忘れても、「○○ちゃん、ほら、うがいするのよ」と、お友だちに言われて、やっています。これをみても、生活習慣をつける上で、集団生活が、いかに大きな役割を果しているか、がわかりました。

はじめてマーチを弾いた時、子どもたちが、何となく歩きにくそうで、元気のないことに気がつきました。どうしてなのか、その時はよくわかりませんでしたが、後になって、弾き方と、テンポの悪かったことが原因だったと思いあたりました。マーチの場合に限らず、子どもたちは、リズムやテンポと同時に、弾く人の気持に、とても敏感なことを知りました。いくら譜面どおりに弾けても、子どもたちはリズムにのってきません。一番大切なのは、いつも子どもたちと一しょに動いているつもりで弾くことだと知りました。

毎日の経験を大切にして、それから多くのことを学びとる努力を忘れずに、子どもたちと共に、成長していきたいと思います。

（日本女子大学付属豊明幼稚園）